

子供たちにとっての  
『第3の場作り』のために

～ 学童風の子クラブにしか  
出来ないこと ～



社会福祉法人 愛護会

第二東水沢保育園

保育士 佐藤 健

## 1. 研究主題

子供たちにとっての『第3の場作り』のために  
～ 学童風の子クラブにしか出来ないこと ～

## 2. はじめに

「ただいま～!!」今日も子供たちは元気よく学童に帰ってくる。第二東水沢保育園「学童風の子クラブ」を利用しているのは、小学校1年生～3年生までの第二東水沢保育園と東水沢保育園の卒園児たち。今年度は35名の利用登録があり毎日がとてもにぎやかだ。ともに笑い、ともに喜び、時には悲しみ、子供たちと様々な経験を通し共感しあいながら、私も学童保育を担当して4年目を迎えた。

これまで子供たちと触れ合うなかで得た経験や知識に加え、様々な研修への参加、他の児童センター、児童クラブの指導員方との意見交流のなかで、今の学童保育の情勢と課題を知ることができた。

昼間、就労等で保護者が家庭にいない子供たちは、平日学校が終わると毎日、また夏休み等の長期休み期間は朝から学童保育を利用し、みんなで様々な活動を通して過ごしている。小学校と学童保育での生活時間を計算し比較してみると、学童保育で過ごす時間の方が小学校よりも多いことが分かる。(添付資料※①) このことから、もはや学童保育は、「放課後に子供を預ける場所」というだけの存在ではないのではないだろうか。

子供たちが学童保育で過ごす「放課後」という時間は、文字通り「課題から解放された後の時間」である。学校でたくさん課題をこなしてきた後に過ごす時間だからこそ、『安心できる仲間と、ホッとできる居場所でありたい』、『遊びを中心とした、自発的、主体的に好きなことができる時間でありたい』と考え保育に当たっている。子供たちにとっての“安心とは何か”、“家庭とも学校とも違った安心して生活できる『第3の場』としての機能を果たすためにはどうあればよいか”、“第二東水沢保育園『学童風の子クラブ』だからこそできることがあるのではないか”と考え本研究テーマを設定した。

## 3 研究のねらい

- ・ 子供たちにとっての“安心とは何か”を考え、家庭とも学校とも違った安心して生活できる「第3の場」を作る。
- ・ 「保育園併設学童保育」という特色を活かし、その中でしか育たない子供たちの心の成長を、実践を踏まえ考える。

## 4. 研究の仮説

- ・ 子供たち、保護者の安心する場所を考え目指すことで、それが「第3の場作り」につながるのではないかと。
- ・ 保育園併設学童保育だからこそ、異年齢交流の中で“小さい子への思いやり”、“自信”、“意欲”等が育つのではないかと。

## 5. 実践

〈 安心できる・安心して預けられる場所を目指して 〉

### ○『学童風の子クラブ』とは

学童風の子クラブは原則として「第二東水沢保育園と、姉妹園である東水沢保育園の卒園児、小学1年生～3年生までの児童」を対象としている。保育園時代から接しているため、利用する子供たちの成長の様子、特徴など細かなことも把握できている。学校から帰ってくると、学童保育の担任だけではなく、顔なじみの職員、園児たちから「おかえりなさい!」と温かく迎えられ、ホッと一息つけるようだ。また、保護者も安心して子供を預けることができている。

新年度初めには、新たに学童保育を利用するお家の方々への保護者説明会を開いている。保育園併設ということで、保育園と同じような感覚で学童保育を利用する保護者の方々もいて、「給食は出ないのですか?」「夏休みの時、小学校のプールへの送り迎えはしてもらえないのですか?」という質問もある。「保育園併設ですが、保育園と学童保育は違った環境であり、在籍乳幼児同様の利用料の軽減措置はありません。」「保育士の判断だけではなく、保護者間での話し合いをもって決定していただく場合もあります。」「小学生ということで、子供たちの自主性を尊重しています。」等、質問に対して答えている。なかには、「学童でしっかり宿題をさせてください。」という保護者からの声もあり、その際は、「宿題をする環境は整えています。宿題をするかどうかはあくまで子供たち自身の判断に委ね、お家に帰ってからお家の方が責任を持って確認をしていただくようお願いいたします。」と話している。

### ○小学校、地域との連携

新年度には常盤小学校、姉妹小学校を訪問し、校長先生、担任の先生、学童保育との連絡を図る担当の先生との打ち合わせをしている。そして月毎に、行事が載ったお便りや下校時刻表を子供たちを通して渡してもらい、小学校の動きに合わせた対応を取るようにしている。また、学童担当の保育士も授業参観、学校開放、行事などにも積極的に参加し、学校での子供たちの姿も見ることができている。

常盤小学校に通う子供たちは保育園まで歩いての帰園となり、特に1年生には安全面を配慮し下校指導を行っている。4,5,6月と子供たちの様子を見ながら、徐々に迎えに行く距離を短くし、7月からは自分たちだけでの帰園となる。小学校、家庭との連絡のやり取りが重要になってくる。

地域の子供たちを見守る姿勢も充実している。子供たちの登下校を見守るスクールガードの方々の存在だ。地域のボランティアの方々に構成されているスクールガードは、登下校時に交差点や横断歩道などの車の通りが激しいところに立ち、子供たちに危険のないよう声を掛けてくれる。その他にも町内会、子供会の方々に構成されたリンリンパトロール隊もあり、夕方鈴を鳴らしながら見回り、防犯を呼びかけている。昨年当園での文化祭では、リンリンパトロール隊の方々を招き、4月から小学生になる子供たち、保護者に登下校時や道路を渡る時の注意、防犯についての話しをして頂いた。学童の子供たちがリンリンパトロール隊、スクールガードの方々とより親しくなり、困った時に助けを求められ

る関係作りをしている。

学校—家庭—学童だけでなく地域も一体となり、子供たちを見守ることで保護者も安心して子供たちを学校へと送り出すことができているのではないかと思う。

小学校、学童保育という新たな環境になることへの不安を保護者の方々も感じている。だからこそ子供たち同様に保護者の不安も受け止め、そして「学校、学童、地域の人達全員で見守っているよ」と知らせていくことで、子供たち、保護者にとっても安心できる場所作りが実現できている。

### ○東水沢保育園との連携、職員の関わり、子供たち同士の関係性

から作られた「安心できる場所」

～ Nの実例をふまえて ～

学童保育の利用を第二東水沢保育園の卒園児が大多数を占める中、東水沢保育園の卒園児は毎年1～2人と少数である。そのため、東水沢保育園の子は、慣れない環境と不安から登園時に泣き出してしまうこともある。

Nもその1人で、母親と別れた際に寂しくなり泣いていた。「不安だよ。慣れるまで先生と一緒にいよっか。」としばらく保育士が寄り添っていたが、次々に登園する子供たちに「初めてだね！名前なんていうの？」「トランプ一緒にしようよ！教えてあげるからおいで!!」と声を掛けられ、徐々にNの緊張もほぐれていった。

声を掛けた子供たちの中に、Nと同じように東水沢保育園の卒園児である2年生のYの姿があった。「おれのこと覚えてる？おれも東水沢保育園だったから初めて学童に来た時は緊張したけど、今はみんな友だちだから楽しいよ!!大丈夫だよ!」「そうそう、慣れてくればNもYみたいにすぐうさくなるよ。」「誰がうるさいって!!?」というYの励まし、やり取りを聞いてNも安心したのか、子供たちの輪に入って遊び始めた。

迎えの時間になり、そこには友達と汗だくになってドッジボールをしているNの姿があった。迎えに来たNの母親は「朝、保育園を出るのがつらくて、職場でもNのことが気になったからできるだけ早く迎えに来てみたけど、心配して損したみたい。」と、Nを見ながら一言。今日一日のNの様子を話すと、母親も安心したようで学童保育を利用するのが不安だったこと、出勤時間が早い朝早い時間帯から子供を預けなければならないこと、真城小学校に入学するため平日はどうすればいいか等々、胸の内を話してくれた。その後、Nと保護者を知っている当園の保育士や、東水沢保育園でNの担任だった保育士からNのことや家庭のことを聞き、援助の方法を考えた。

翌日の朝のこと。昨日登園時に泣いていたNが、HやK等学童の子供たちと一緒にサッカーをして遊んでいた。Nの表情には昨日までの不安や寂しさは感じられず、「N～、ご飯の後一緒にサッカーしようぜ!!」「Nって、かるたすごい速い!!」と、Nと遊ぶにぎやかな声や、「先生～!!昨日みたいにドッジボールしようよ!!」とNから声を掛けてくることもあった。母親は「今日は先生とドッジボールの勝負するから、早く学童行きたい」ってすごい楽しみにしてたんですよ。昨日の朝のことがうそみたいです。身体を動かして遊ぶのが好きだから、学童で思いっきり遊んだのが楽しかったみたいです。」と嬉しそうに話してくれ、「帰ろうよ!」と誘う母親に、「もう少しだけ!」とドッジボールに夢中になっているN

の姿が印象的だった。残念ながら、小学校が始まると、小学校近くの児童センターを利用することになり、Nの学童保育の利用は年数回となってしまったが、「久しぶりの学童で緊張しているかな?」という私の心配をよそに、来るたびに元気な顔を見せてくれ、友達と遊びまわっている。「児童センターにも慣れたけど、先生と一緒に遊んだり、思いっきり遊びまわれる学童に来るのは、久しぶりでも楽しみみたいです。」と母親も嬉しそうに話しをしてくれる。

「夏休みになったら、N来るかな〜。」「このおみやげ、N来た時に渡せるようにとおこうよ。」と、子供たちからNへの何気ない心配りも見られ、例え短い時間でも一緒に過ごしたことで子供たちのなかにNの存在が大きくあり、“友達”という意識があることを嬉しく思う。Nは家庭等の状況から、友達と関わるのが苦手で、自分から意思を出せる子ではなかった。しかし、学童の子どもたちの温かい声かけ、雰囲気安心して心を開いていたものと思われる。

東水沢保育園の職員と連携をとり、情報や対応の仕方をすぐにやり取りできたことで、職員全体での声掛け、そして何より子供たち(=友達)同士の関係性がNと保護者にとっての学童保育を「安心できる場所」に築き上げてくれたものとする。

＜『保育園併設学童保育』という特色を活かした 日々の生活の中で＞

#### ○グループ活動

学童保育では各グループを決め、リーダーが中心となって係活動をしている。係は5つあり、一日毎に交代しておこなっている。

このグループを決めるのは、新一年生が学童にそろった4月で、その日のうちに新グループ対抗でのゲームをする。これは1年生の緊張をほぐすため、また、自分のグループに入った一年生のお世話や、教えてあげようという上級生としての自覚を持たせるための良い機会となっている。初めは緊張していた1年生だが、おどけたり、笑わせようとする2、3年生の姿に、笑顔になってゲームを楽しむ姿が見られる。

ゲームが終わるとグループの上級生が「こっち来て、教えてあげるから!」「こうすればいいんだよ!」と掃除の仕方や、おやつはどこから持ってきてどこに片付けるか等を丁寧に教えてくれる。1年生も真剣な表情で上級生の話を聞いている。子供たちが自分で気づき、行動できるようさりげなく援助し、自信を持って活動が出来るようにしたいと考えている。今では、「先生～、もうテーブル拭いといたから!」と2、3年生に言われなくても自分で当番表を見て気付くことが出来るようになっている。普段の“友達同士”という『横のつながり』だけではなく、グループ活動の時に見られる“上級生から下級生へ”という『縦のつながり』もあることが、子供たち同士をつなぐうえでとても重要だと考えている。大人から教えられるのではなく、自分より少しだけ先輩の子からの教えは無理なく身につくのである。【発達の最近接領域】(添付資料※②)

グループ活動という集団活動を通して、まずは小さな集団作りを。そしてそこから学童全体という大きな集団作りを目指して子供たち同士、さらに保育士とのつながりを深めていきたいと考えている。

## ○幅広い異年齢交流の場

第二東水沢保育園「学童風の子クラブ」最大の特徴は、在園する 0～5 歳までの約 150 人の園児たちと触れ合える「幅広い異年齢交流の場」であるということだ。

「学童風の子クラブ」は、保育園の子ども達と一緒に生活していることで、周りには園児たちの姿がたくさん見られる。園庭に出ると、「一緒に遊んでいい?」、「僕も混ぜて!!」と園児たちから声をかけられ、泥団子作りや、鬼ごっこ等のルールを優しく教える姿も見られる。「小さい子のお世話は疲れるよ。」とは言いながらも、手をつないで走り回る姿や、園児たちと話しをする時の優しい笑顔からは、小さい子を思いやる優しい気持ちが感じられる。

また、0 歳児たんぽぽ組の赤ちゃんが学童保育の部屋に遊びに来ることもある。一人っ子、上の兄弟しかいない、という子供たちにとってはとても貴重な体験である。学校から帰ってくると、「小さい子のお世話してきていい?」と言って小さい子のお部屋に行き、触れ合い遊びをする姿も見られる。学童の部屋に戻ってくる子供たちは生き生きとした表情をしていて、学校の中で緊張していた気分をリフレッシュできる場となっている。

遊びたくても「保育園の子ども達が寝てるから、静かにしよう。」と、午睡している園児のことを考え我慢する気持ち。未満児が学童の部屋に遊びに来た時、園児たちに危険がないようにと自分たちのあそびを止めて、赤ちゃん達の遊びにあわせてあげる小さい子への思いやり等子供たちの心の育ちが見られ、これも、保育園併設だからこそできる幅広い異年齢交流の中で育った、子供たちの心の成長だと考えられる。0～9 歳という異年齢交流の中で、自分より小さい子、自分たちよりも弱い存在、守ってあげる存在に気づくということは、これから成長し、やがて親になる子供たちにとってはとても貴重な経験となると確信している。

## 6. 考察

今回の研究を通し、子供たち、保護者にとっても安心できる場所作りが実現できていること。「保育園併設学童保育」という特長を活かした幅広い異年齢交流の中で育っている子供たちの心を、確認することができた。

“子供たちのホッとできる場所、安心できる場所”とは、“安全な中で、大人に必要以上に制限されることのない《主体性》を重視した空間”ではないかと考える。

「保育園併設学童保育」のため子供たちの活動が制限されることもあるが、その反面、園児たちのことを考えて我慢する気持ち、小さい子への思いやり等の心も確かに育っている。

そのような環境の中で“子供たちの主体性を尊重して考える”ということが、子供、保護者へと伝わり“安心感”へと変わっていくのではないだろうか。“安心できる場所”というのは環境や場所、ましてや整備して作られるものでもなく、子供たちと正面から向き合い、触れ合うことで築かれる“信頼関係”こそが本当の“安心できる場所”なのでないかと考える。だからこそ子供たちに寄り添い、同じ目線に立ち、一緒に物事を考えていくことが、学童保育の指導員だけではなく、子供たちに携わるすべての人に必要だと思っている。

## 7. 課題

この研究を進める中で、日々の保育で私自身が悩んでいること、気付いたこと、葛藤…等様々な物が浮かび上がり、“これからの学童風の子クラブの課題はなにか”と考えることができた。

### ○環境整備の時間が不足

学童担当の保育士は、子どもたちが学校から帰ってくるまでの時間は、保育園の各クラスに入り保育に当たっている。子どもたちが帰ってくるまでの時間を使って環境を整えたり、活動の準備をする時間が十分でない。様々な遊び、活動を行うために子どもたちと工夫しあって楽しんでいるが、遊びの幅が狭まってしまっている現状は否めない。

少ない時間の中で、どのようにしたら園児も学童の子供たちもお互いにのびのびと過ごすことが出来るのかを考え、工夫していくことが私の課題となる。

### ○父母会の存在

今、学童風の子クラブには父母会がない。これまでの生活では、子供たちと保育士のつながりは深まったが、保護者とのつながりは、その子1人ひとりの保護者としつつながつていなかった。この先、「子供—保育士」とのつながりから、「子供—保育士—保護者」へと、つながりを広げるためにはどうしたらいいかと考えた時、父母会の存在に気づいた。

保護者同士のつながりが深まることで、自分の子供だけではなく他の子供たちを知ることができ、目を向けることができる。そして保育士と同じように子供1人ではなく、学童全体を考えられるようになることで、保護者も保育士と一緒に子供たちの育ちを考え、子供たちの成長や、喜びも保護者と“共有”することができるのではないかと考える。保護者との共有、共感、そして学童保育の幅を広げるためにも、父母会の存在が必要不可欠である。

以前、父母会のことを園長に相談した。そこで、「父母会を作り、活動することは、ゆくゆくは『地域子育てコミュニティの創造』につながる。」とのご指導をいただいた。

園児だけでなく、学童の子供たちまで含めた“第二東水沢保育園”と捉えると、学童風の子クラブも、当園が目指している『地域子育てコミュニティの創造』に取り組まなければいけない。今はまだ、父母会を立ち上げるために保護者の方々と話し合っているところだが、保護者と共に、『地域子育てコミュニティの創造』を視野に入れて活動し、進んで行きたい。

## 8. まとめ

学童保育を「家庭や学校と違った第3の場」と捉えた時に、学童風の子クラブはそれ以上の役割を果たさなければいけないと考えられる。

学童風の子クラブを利用する子は、保育園生活の6年、学童保育生活3年の、合わせて9年を第二東水沢保育園で過ごし、10歳という年齢で本当の意味の卒園を迎えることとなる。

幼児期、そして児童期へと移行する時期を、家族や大好きな先生たちに見守られて過ごすこの9年は、子どもたちにとってかけがえのない経験となるだろう。学童風の子クラブは、子供たちにとって「居場所」以上の、「心の中にいつまでも残り、いつでも卒園児が集える場所」つまり『ふるさと』というもう一つの“家”のような存在を目指していきたい。

フランスの児童福祉の本にこのような言葉が記されているようだ。

『こどもの“心”を折るくらいなら、腕を折った方がいい』

…子供の挑戦したい！という気持ちを大人が否定して折ってしまうくらいならば、いっそ挑戦した結果、失敗して腕を折ってしまったとしても、その経験の方がその子自身のためになる…という意味だそうだ。

子供の挑戦したい！！という気持ちを「ダメ！」とやって止めるのは簡単だが、信じて見守るということは、とても難しい。しかし、この『信じて見守る』という姿勢が、子供たちに関わる全ての人たちに必要であり、学童の指導員、保育士である私自身に最も必要なことなのかもしれない。

日々の生活の中で、子供たちは様々な表情を見せてくれる。少し「ふう〜」と息抜きをしたい時、遊びが楽しくて夢中になっている姿など…。そんなありのままの姿に向き合い、また、一緒に喜びを共感しあったりしながら、私自身が子供たちの安心できる存在・居場所になっていきたいと考える。

3月。学童風の子クラブで、今までともに過ごしてきた3年生が卒業を迎え、3年生に内緒で、1,2年生とのおわかれ会の準備が始まる。

この時期になると3年生は決まってみんな同じことを言う。

「先生、学童卒業してもあそびに来るからね！！」

…この言葉に、毎年胸を打たれる。きみにとってここは居心地のいい場所、安心できる場所なんだね。と、嬉しくなり胸が熱くなる。

「おかえりなさい!!」とこれからも、学童の子に限らず、遊びに来た子や、顔を見せに来た子供たちを笑顔で迎えてあげたい。

ここは学童保育という名の、子供たちのもう一つの“家”なのだから。

## 1. 【学童保育（放課後児童クラブ）とは】

### 事業の内容

○共働き家庭など留守家庭のおおむね10歳未満の児童に対して、児童館や学校の余裕教室、公民館などで放課後に適切な遊び、生活の場を与えてその健全育成を図る。

○放課後児童クラブは、平成9年の児童福祉法改正により事業が法定化され、当該事業の実施については、市町村の努力義務として規定されている。

〔児童福祉法（昭和22年法律第164号）〕

第六条の二第二項 … この法律で、放課後児童健全育成事業とは小学校に入学しているおおむね十歳未満の児童であつて、その保護者が労働等により昼間家庭にいないものに、政令で定める基準に従い、授業の終了後に児童厚生施設等の施設を利用して適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全の育成を図る事業を言う。

第二十一条の十 … 市町村は、児童の健全な育成に資するため、地域の実情に応じた放課後児童健全育成事業を行うものとの連携を図る等により、第六条の二第二項に規定する児童の放課後児童健全育成事業の利用の促進に努めなければならない。

### 対象児童

○保護者が労働等により昼間家庭にいない小学1～3年の就学児童。

○その他、健全育成上指導を要する児童

（特別支援学校の児童、小学4年生以上の児童）

### 実施場所

小学校の余裕教室、小学校敷地内の専用施設、児童館・児童センター、公民館などの公的施設、民家・アパート、保育所、幼稚園、団地集会所、その他専用施設など

### 運営主体

市区町村、社会福祉法人、NPO法人、保護者会、保護者や地域住民等により構成される運営委員会、任意団体など

### 職員体制

○放課後児童相談員を配置

○放課後児童相談員の配置は、児童福祉施設最低基準第38条に規定する児童の遊びを指導する者の資格を有する者が望ましい。

## 2. 【学童保育という存在】

### ○共働き等で昼間保護者が家庭にいない子供たちは、学童保育が家庭の代わり

共働き・一人親家庭などで昼間保護者が家庭にいない子供たちは、学校が終わると毎日、生活する場である学童保育に帰ってくる。学童保育で生活することを基本として、学童保育から出かけて行く。

働く親を持つ子供たちには、家庭に代わる生活の場＝学童保育が必要である。

### ※①< 学童保育で過ごす生活時間は小学校より長い >

子供たちが学童保育で過ごす時間は、小学校での生活時間よりも約 360 時間も多い。

共働き、一人親家庭の子供たちは、平日の放課後・土曜日・長期休み等は、「家庭に代わる毎日の生活の場」としての学童保育で過ごしている。学童風の子クラブの年間開設日数は 295 日である。時間にすると 1690 時間にも及ぶ。

学年によって授業時間が違い、1年生～3年生の平均をとれば次のようになる。

### ○児童が小学校にいる時間（1年生～3年生の平均）

平日は 5 時間授業が基本なので、在校時間は 8:10～14:50 までの 6 時間 40 分。

・平日 201 日×6 時間 40 分＝1340 時間(※1)

学年ごとに授業時間が少しずつ異なることを考慮する。

・1年生は週 1 日 4 時間授業 … -50 分×79 日＝-65 時間 50 分

・3年生は週 2 日 6 時間授業 … +50 分×40 日＝+33 時間 20 分

(-65 時間 50 分+33 時間 20 分)÷3＝ 学年平均約-10 時間 50 分(※2)

1年生から3年生の年間の平均在校時間数

1340 時間(※1) -10 時間 50 分(※2)＝ 約 1329 時間 (※3)

### ○児童が学童保育にいる時間（1年生～3年生の平均）

学童風の子クラブの平均的な開設時間

・平日の保育時間は、下校後 15 時 15 分～18 時 30 分 → 3 時間 15 分

199 日(平日)×3 時間 15 分-{-10 時間 50 分(※2)}＝657 時間 35 分(※4)

・土曜日は、7 時 30 分～18 時 00 分まで保育 → 10 時間 30 分

51 日×10 時間 30 分＝535 時間 30 分(※5)

・長期休み日、7 時 30 分～18 時 30 分まで保育 → 11 時間

45 日×11 時間＝495 時間(※6)

1年生から3年生の年間の平均保育時間数

657 時間 35 分(※4) +535 時間 30 分(※5) +495 時間(※6)

＝年間約 1688 時間(※7)

1688 時間(※7) -1329 時間(※3)＝359 時間

上記より在校時間数よりも学童保育時間数のほうが 359 時間多い。

( 資料：奥州市立 常盤小学校・姉体小学校 提供による )

### 3. 【 学校や家庭と違った第3の場 】

#### ○子供たちにとっての放課後とは 放課後=課題から離れた後の時間

安心できる仲間と、ほっとできる居場所であること。子供たちが、学校でたくさん課題をこなしてきた後に過ごす時間であることから、遊びを中心とした、自発的、主体的に活動できる時間とする。「あれこれしなさい!!」と言われたらとても窮屈な場になってしまう。学校の学習が大変になってきている今、もっとも子供たちが自発的、主体的に過ごし、その中で、失敗や間違いを体験しながら、自分育てができる場でありたい。

自分で考え・行動し結果が返らないと学べない。「危ないこと」・「やめた方がいい事」を繰り返し学んでいく。その経験ができるのは放課後の時間であり、毎日“とことん遊びきる”事が大切。

- ・ 課業から解放された放課後は自主的に好きなことができる時間

まさに遊びの時間。評価や管理から子供たちを解放してあげる。

- ・ ゆったりとした時間の大切さ

大人のペースや社会のペースに子供をあわせるのではなく、ゆったりとした時間の流れが保障されていることで、自分の意思で生活を組み立てる力、自分の感情をコントロールする力が芽生えていく。

- ・ 子供たちがやりたい遊びはさまざま

お互い誘い誘われるなかで、その子のペース(時間)で遊びの幅と仲間が広がっていく。遊びの様子や声は子供たちの「心」を動かす。

- ・ 遊びは自分育ての時間

「やってみようかな」「どうしようかな」という葛藤を得て、他人ではなく自分の意思で判断していくプロセスが大切。「指示」されることが多い年齢だからこそ、自ら判断し決定していく時間・空間を保障する。

- ・ ※② 発達の最近接領域

(子供が発達していくために最も無理なく、しかし必要な発達課題を他の子供と競い合っ身につけていく課題の領域)

学童保育という“友達同士”の『横のつながり』だけではなく、“上級生から下級生へ”という『縦のつながり』もある中で、大人から教えられるよりも知識等が無理なく身につく。